

人と人、人と地域のきずなを結ぶ情報誌

京葉銀行

きずな

2025
秋・冬号
No.31

【特集】

故郷としての里山の姿を次世代に
伝えていくため里山の田んぼを守り、
ホタルの復活を目指す。

習志野市 ほたる野を守るNORAの会

【散歩道】

日本のソーセージ製法 伝承の地への散歩道

実叕駅を出発、歴史的建造物を見学し、日本の
ソーセージ製法 伝承の地に残る石碑を訪ねる

故郷としての里山の姿を次世代に伝えていくため 里山の田んぼを守り、ホタルの復活を目指す。



習志野市の通称「ほたる野」の里山を舞台に、田んぼを守り、地域の象徴ともいえるホタルの復活を目指す市民グループ。素晴らしい里山の風景に惹かれ、多くの市民の方々も活動に参加中。



吉井伸二さん

有志による数人の会員がまず行ったのは、ホタルの復活に向け芦や篠竹でいっぱいとなった土地を再び開墾し、井戸を掘り、ホタル自生地の復活を目指しました。こうした作業を進めるうちに稲作を続けることが難しくなった農家さんがさらに増え、年を追うごとにお手伝いさせて

故郷としての里山の姿を 伝えていくために

の大きな変化、周辺の環境の変化などによって徐々に稲作が困難になりました。また、湧水も枯れてしまったことからホタルの姿も消えてしまいました。そんな状況に危機感を持って平成10年頃から活動を開始したのがNORAの会です」と設立について教えていただいたのは、会長の吉井伸二さん。今回は長老的存在である渡部一之さん、事務局長の宮入謙さんとともにお話をお伺いしました。

「古くから『ほたる野』と呼ばれていたこの田園地区は、平成の始めまで地元農家さんによってずっと稲作が続けられてきた場所で、湧水が豊かでホタルの名所でもありました。しかし、区画整理されていない昔ながらの農地のため大きな機器が入らず、全て手作業で行う稲作の作業

です。」「ほたる野を守るNORAの会」(以下、NORAの会)は、習志野市実籾駅からほど近い、「ほたる野」の里山を舞台に、お米作りを通して自然環境保護や食育の体験型学習を行う市民団体です。

京成本線実籾駅を下車し、南口から約10分。実籾本郷公園を目指して歩いていくと、公園の傍にいきなり現れる広々とした田んぼの風景。ここが習志野市に残る貴重な里山、NORAの会の活動の場となっている「ほたる野」です。

現在、習志野市には約2ヘクタールの田んぼが点在していると言われていますが、この「ほたる野」の広さは1ヘクタール以上。市内においては数少ない里山の風景を残す田んぼです。

「ほたる野」を舞台に活動中
実籾に残る貴重な里山



いただく範囲が広がり、今では、ほとんどの田んぼの稲作の作業をお手伝いすることになりました」と吉井さん。そこから25年以上経過した現在は、男性24名、女性8名、合計32名の会員が所属されています。

NORAの会の活動の中心は米作りです。作っているのはもち米。5月に行われる田植え、9月に行われる稲刈りが最大のイベントですが、それ以外の月にも、お米作りには1年を通して多くの作業が必要となります。田植えの前の田起こしや肥料撒き。水の管理。周りの草刈り。鳥からお米を守るためのネットの設置など必要な作業は次々に発生します。

「この会に稲作の経験者はいませんでした。私自身は米どころの出身ということもあり、米作りの作業自体は知っていました。そんな知識に加え、作業を通じた経験が加わって、稲作を続けています」と吉井さん。

そして、こうした作業の間には「流しそうめん」や「収穫祭（餅つき）」など市民の皆さんも参加できる楽しいイベントも数多く用意されています。

さらに、NORAの会の田植えまつりと稲刈りまつりには、地元を中心にそれぞれ150名もの市民の方が作業に参加されます。

「このイベントは私たちの会にとっても大切なものです。次世代の子どもたちに心の故郷として里山の姿を伝えていくこと。米作りを通して自然に触れ、生態系を観察し、食育を体験してもらうこと。このための絶好の機会だと思っています」と吉井さん。

募集によつて参加された市民の方のほかにも、学校単位で地元小学校3校の児童も毎年作業を手伝ってくれています。

「みんな泥の中に足を突っ込むなんてやったことがありませんから、キヤーキヤー歓声をあげて、楽し



ともあるので、毎日様子を見に来る必要があります。そのため毎日畑での作業を済ませて、そのついでに田んぼの作業もやっていく。そんな流れも自然に出来上がっているようです。

ホタル再生のための活動を継続中

この地域の通称「ほたる野」の象徴といえるホタルの復活も、NORAの会のもう1つの大切な活動です。

もともとNORAの会が発足された時にも、田んぼを守るとともにホタルが消滅してしまったことに対する危機感が活動を始める重要なきっかけとなっていました。

「ホタルの存在は地域の象徴で誇りでもありました。ですから里山の景観維持や稲作体験と並んで、ホタル復活と保護が私たちの活動の原動力であり大切なロマンでもありま

ながらどんどん作業が進んでいきます」とのこと。

「作業は午前中に行います。当日は足洗い用のプールでの水遊びなど、楽しい思い出作りも支援しています。田植えをする5月には鯉のぼりも上げて、本当に見事な風景になりますよ。ご家族でみえて、作業を体験した後はお弁当をお隣の実籾本郷公園で食べて帰られる方も多いようです」と吉井さん。

今年の稲刈りは9月6日に1000名ほどの方々が作業を行い、約240kg分のお米が収穫されました。60kgのお米が1俵ですので、4俵分のお米を収穫したことになります。



す」と吉井さん。

ホタルの再生のための活動はNORAの会の発足と同時に始められました。綺麗な水を確保しホタルの自生場所を復活させ、ホタルの幼虫の放流も続けてきました。しかし、一度壊れてしまった環境のなかでなかなかホタルを再生することは難しく、現在も研究と試行が粘り強く続けられています。5年前には、ホタルが暮らすための環境を整えたピオトープ「ホタルハウス」が田んぼの端に設置され、ここでホタル育成の実験も進められています。

NORAの会は、これらの活動を通じて、地域に貴重な自然体験の機会を提供し、食育を推進するだけでなく、失われつつある地域本来の自然環境や農業文化の保全にも大きく貢献しています。現在平均年齢67歳。会員の高齢化や近年の厳しい天候による影響などさまざまな困難を抱えながらも、子どもたちの笑顔と地域への貢献を原動力として今日も元気に活動を続けています。

最後に吉井さんから「いつでも誰かが作業をしていますので、ご興味のある方はこの素晴らしい場所をぜひ見に行ってください」とのお言葉でした。



渡部一之さん

この場所に来るだけで気持ちがいい

「ここには私たちを含め毎日誰かしらが来ていますよ。作業をするというのもあるのですが、とにかくこの風景の中に身を置いているのが本当に気持ちいいんです。季節によって姿を変えていく田んぼの風景。やってくるたくさんの鳥たち。気持ちよい風。ここにいるだけでとにかく気持ち晴れるんです」と渡部さん。

田んぼの真ん中には芦が生えた広い一角がそのまま残されています。不思議に思ってお尋ねすると「毎年カルガモが来て、外敵からひなを守りながらここで子育てをするんです。だからここだけそのまま残しています」との答え。

そんな稲作、田んぼというキーワードに誘われてNORAの会の活動に参加したのが宮入謙さん。「今から9年前の話です。仕事で忙しい



宮入謙さん

「できればいつも来たいのですが、平日は仕事、週末はここ、となると家にいる時間が無くなってしまします。その調節がなかなか難しいです(笑)」と宮入さん。

田んぼの端には会員の方の希望で野菜などを栽培する畑もあります。野菜は収穫の時期になると1日放っておくと大きくなりすぎてしまうこ



習志野市 実籾駅周辺

日本のソーセージ製法 伝承の地への散歩道

実籾駅を出発、歴史的建造物を見学し、日本のソーセージ製法 伝承の地に残る石碑を訪ねる

実籾駅周辺には、習志野の歴史を物語る多くのものが今もしっかりと残されています。代々この地の名主を務めた旧家の大邸宅、そして縁結びの御利益でも有名な古刹、最後には日本にドイツソーセージの製法を初めて伝えたと言われる場所を訪ねます。



散歩の出発点、京成本線実籾駅



文教センター公園の前を通る並木道。この辺りは緑が多く、並木が植えられた綺麗な通りになっています。

日本のソーセージ製法 伝承の地へ

今回の散歩は、京成本線実籾駅を出発し、この地域の歴史的建造物や古刹をめぐり、最後は日本のソーセージ発祥の地を訪ね、再び実籾駅へと戻る約1時間のコースです。

南口の駅前にあるお寺は無量寺。お寺の境内を通り、正面へ回ると、左右に樹木が並んだ参道がまっすぐ伸びています。突き当りは御成街道（県道69号）。ここを右折し、最初の目的地、実籾本郷公園の一角にある旧鶺鴒^{こじや}田家住宅へと向かいます。

踏切に向かって歩き、公園の表示板に従って左折、なだらかな坂を下りていくと、すぐに広々とした公園が現れます。旧鶺鴒田家住宅はこの実籾本郷公園内。小川も流れる自然

な待遇を受けました。捕虜によるオーケストラは、ヨハン・シュトラウス2世の「美しき青きドナウ」など多くの名曲を演奏したと伝えられています。

そして彼らは音楽と同時に日本人にハムやソーセージの製法を伝えました。そのため習志野は「日本のソーセージ製法 伝承の地」と言われるようになります。その伝統を受け継ぐのが先ほど登場した「習志野ソーセージ」です。

さてここから実籾駅へ戻ります。帰る途中にちよつとしたご褒美。京成本線の線路脇にある公園に立ち寄ります。公園の中央には小さな丘。その上に設置されたベンチからはまさに目の前を通る電車が見放題。ファンにはたまらない場所です。

豊かな公園の中にある立派な門構えの入り口を入ると、広々とした庭

の脇に大きな藁ぶき屋根の家が。鶺鴒田家は江戸時代にはこの地域の名主を代々務めた旧家です。L字型に曲がった主屋は「曲屋^{まがりや}」と言い、千葉県内の民家としてはとても珍しい建築様式です。建築は1727年から1728年で、当時の名主の生活様式が垣間見られる貴重な場所です。

次に訪れるのは、大原神社。先ほど来た道を御成街道まで戻り、踏切を渡るとすぐに見えてくる大きな森が目的の場所。立ち入ってみると樹木に囲まれた境内は空気も少しひんやりと感じられ、気持ちの良い風が吹いています。

大原神社は縁結び、財宝運、交通安全、芸能運などのご利益があると



旧鶺鴒田家住宅
元々、御成街道沿いに建てられていたものを、今の場所に移設し、公開しています。千葉県指定有形文化財。



大原神社
創建900年の歴史がある神社。遠い昔から縁結びの神社として広く知られています。



レオニダス 実籾店
ベルギーチョコレートのお店ですが、習志野ソーセージも販売されています。(現在チョコレートは予約制)



文教センター公園
木陰が多く、池が設けられ涼しげで、とても落ち着きます。



ドイツ捕虜オーケストラの碑
東習志野四丁目児童遊園内にある碑。大正時代にこの辺りに捕虜の収容所があったようです。



千葉の野に生きる 野花と野草

-15-

暑かった夏が終わり、ようやく過ごしやすい季節が到来しました。気候も穏やかなこの時期は、お散歩にも最適な季節です。

普段の散歩コースでも、道端に目をやれば、意外なほど多彩な野花や野草を見つける事ができます。その中の1つか2つ、名前や特徴を覚えておけば、散歩の楽しみが1つ増えるでしょう。

■アキノノゲシ

漢字で書くと「秋の野芥子」。名前の通り、秋になるとその姿が目立ち始めます。日当たりの良い乾燥した場所に多く生え、とても背が高くなる草です。花の頃は草丈が2m近くになることも多く、ほかの植物から抜きん出ていて見つけるのも容易です。一方で草刈りの影響を受け

ると、伸び切らず、背が低い状態では咲かせることもあります。

開花は9月から11月頃。落ち着いた薄い黄色をした美しい花を咲かせます。花の時期が過ぎ結実するとその株は枯れてしまします。秋に開花に至らなかった若い株はそのまま越冬し、翌年の秋に開花・結実します。

葉はギザギザしているのが普通ですが、ときにギザギザしない葉をつける株もあります。これはホソバ



アキノノゲシと別の名で呼ばれています。

稲作とともに日本に渡来した史前帰化植物（有史以前に日本にもたらされた植物）と言われ、レタスと同じ仲間に入っていますが、食べることも苦く食用にはあまり向いていません。レタスも収穫しないでおくと、アキノノゲシによく似た黄色の花を咲かせます。

花言葉には「平和」「希望」「幸せな旅」「控えめな人」「謙虚」「心優しい人」「クールな恋」などがあります。

■サラシナショウマ

サラシナショウマはその美しい白い花で知られています。花は小さく甘い香りがします。複数の小さな花が密集して30cmくらいの花穂になり、ふさのような形で咲くため、その優雅な姿がとても目立ちます。花卉のように見えるのは萼片（がくへん）花の萼を構成する小片）で、本来の花弁は細くほとんど目立ちません。

北海道から九州まで広い地域に

存在し、主に山地の木陰や草原で育ちます。草丈は150cmくらいになるものもある多年生草本植物です。葉は大きく、2〜3回羽状に切れ込んでいます。

漢字で書くと「晒葉升麻」。若葉を茹で、アク抜きのため水にさらしてから食べることからきた名前で、ソバでお馴染みの「更科」ではありません。生薬として活用されることもあり、その場合は根茎を用います。消炎鎮痛、発汗解表、痔疾の治療などを目的とした漢方処方に配剤されています。

花言葉は「信頼」と「儂い美」です。秋に美しい花を咲かせることから、秋の庭園装飾にもよく使われています。

